第二句集『雪嶺』は一九六九（昭和44）年に刊行された。後記には「雪嶺は私にとって佐久の自然の代表」とある。この句集で遷子は第九回俳人協会賞を受けた。ここには医師として「卒中死田植えの手足冷えしまま」の句もある。この年に馬酔木同人会長になった。

●俳人遷子の句いよいよ佳境へ

医師そして俳人として励んでいた遷子は、一九七四（昭和49）年四月に胃癌を発病して佐久総合病院へ入院し手術を受けた。しかし、病状悪化で次の年の十一月に再入院となった。このような境涯の中で悲しくも作句はいよいよ冴えて「冬嶺の微塵となりて去らんとす」「わが山河いまひたすらに枯れゆくか」等々の句が詠まれた。この時遷子には、胸部を病み手術を繰返しながら秀句を残した波郷のことが脳裏に去来していたと思われる。

貞祥寺境内に建つ秋桜子連袂句碑

最後の句集となった、一九六八（昭和43）年からの八年間の作品を収めた第三句集の発刊は句友により進められていて、病床の遷子の許に届けられた。

その句集『山河』を手に遷子は六六歳で亡くなったが、この句集により遷子は波郷しか受けていなかった馬酔木最高の結社賞「葛飾賞」を受賞した。

●佐久市短詩形文学祭の選者に

相馬医院の相馬先生が優れた俳人であることは、俳句の結社を持ったり俳句の教室を持ったりしなかったこともあり、地元の人達にはあまり知られていなかった。それはそれが遷子の生き方であったからであった。しかし地元の患者に対する医師としての句も少ないわけではない。その中に次のような句「われを呼ぶ患者寒夜の山中に」もある。

また地元との関わりでは、佐久市の市政十周年を記念して一般市民参加の佐久市短詩型文学祭が一九七〇（昭和45）年から開催されたが、募集した詩・短歌・俳句・川柳のうち俳句の選者は遷子であった。次回からは選者は三人から四人となったが、遷子は病気で辞退するまで連続五回選者を務めた。その後の選者は句友星眠が引き継いでいる。

遷子の俳名はシナノガキの漢語の別名「君遷子」からとられていると言われている。これだけをみても遷子が故郷に並々ならぬ愛着をもっていたことが分かる。

没後一年、前山の貞祥寺境内へ師秋桜子との連袂句碑が建立された。

寒牡丹白光たくひなかりけり　秋桜子

雪嶺の光や風をつらぬきて　遷子

この佐久がそして長野県が誇れる俳人遷子の墓は、家の近くの野沢金台寺にある。

金台寺に建つ遷子が眠る相馬家の墓

（丸山正俊）

参考文献

筑紫磐井ほか四人『相馬遷子　佐久の星』邑書林

荒井武美『相馬遷子小伝』一草舎出版

堀口星眠脚註『名句シリーズ⑩相馬遷子集』宮下翠舟発行

相馬遷子『相馬遷子全句集』遠藤方記念刊行会

佐久の先人たち㉝

中央俳壇で活躍した近代俳人

相馬遷子

（1908～1976年）

野沢町（現佐久市野沢）に生まれて、親の転居に伴い小学生の時に一旦この地を離れたが、何かの力に引き寄せられるように、生れ育った父祖の地へ戻り医院を開業し、そして中央俳壇で有力な俳人として活躍した人。

●医師そして俳人の道へ

俳人相馬遷子（本名富雄）は一九〇八（明治41）年野沢町（現佐久市野沢）に生まれた。家は薬店を営んでいたが、富雄が小学校五年の一九一九（大正8）年に父は店を譲り、上京して米穀商を始めた。遷子は旧制浦和高校（現埼玉大学）を経て一九三二（昭和7）年三月に東京帝国大学（現東京大学）医学部を卒業する。そして医学博士となり医局へ勤めた。

遷子は、一九三五（昭和10）年に教授を中心とする東大医科出身者の俳句の集まり「卯月会」に入る。そして俳誌「ホトトギス」を主宰した高浜虚子門を出て俳誌「馬酔木」により新しい叙情性を導き出すとともに、この俳誌から俳句界屈指の俳人山口誓子・加藤楸邨・石田波郷等を育てた俳人水原秋桜子の指導を受け、師弟として親しく交流した。

また、遷子はこの「馬酔木」により句作に励むとともに、後には楸邨らと人間探求派と呼ばれる石田波郷に兄事し、波郷が創刊主宰した俳誌「鶴」に参加、次の年にはその同人に推された。そして、その次の一九三九（昭和14）年には大きな結社誌であった「馬酔木」の新人賞を受賞し、その翌年には同人となった。

●戦地へ函館へそして故郷へ

太平洋戦争の始まる前年の一九四〇（昭和15）年春に遷子は陸軍衛生部見習士官として応召し、日中戦争中の大陸へ出征した。しかし、病気で除隊となり、本土へ送還され療養に入った。病気が癒えた遷子は、一九四三（昭和18）年に函館病院内科医長として招かれ北海道へ渡った。この地に「鶴」同人で俳誌「壺」を主宰する斎藤玄がいて交流した。そして一九四五（昭和20）年、遷子はここで太平洋戦争の敗戦を迎えた。

敗戦の翌年の三月に遷子は病気になったこともあって函館を去り故郷の佐久へ戻った。五月には斎藤玄の助力で句集『草枕』が刊行された。この年東京で入院手術を受けた。

再び病気の癒えた遷子は次の年の三月に野沢本町の大欅女男木と道を挟んだ向かいで内科の医院を開業した。東京で病院勤務をしていた弟愛次郎も帰郷して外科を担当した。医院はその後転居し、ここは呉服店となった。

開業当時、相馬医院が建っていた場所
現在は呉服店の本社となっている。

●数々の俳句賞を受賞する

開院前も志賀高原や上高地等への吟行をしたが、医院を営みながらも、高原派と呼ばれる句友星眠らと交わりながら句作を続け「馬酔木」へ盛んに投句して、高い評価を得た。

一九五六（昭和31）年には第一句集『山国』（『草枕』を含む）を刊行した。この句集には師秋桜子の「高い境地に至り得た」との序文と波郷の跋文がある。これには「家を出て夜寒の医師となりゆくも」などの句がある。そして次の年には結社賞の馬酔木賞を受賞した。